アジア・アフリカ地域研究 第 20-1 号　2020 年 9 月
Asian and African Area Studies, 20 (1): 174–188, 2020

フィールドワーク便り

ヴィエンチャンでの出家体験からみる僧侶の戒律と生活

安　松　弘　毅 *

はじめに

「ラオスで出家して僧侶になったよ.」

もともと長髪でドレッドヘアーにしていた私の，突然の坊主頭と鮮やかな橙色の袈裟姿の写真は，私のインスタグラムで非常に“インスタ映え”し，過去最多の「いいね！」を獲得した．そして，髪をまた伸ばすのか，もう日本に帰ってこないのか，結婚はできるのか，肉は食べられるのかといった質問が寄せられた.

確かに，出家して僧侶になること，それも東南アジアの上座部仏教国で行なうと聞けば，長期間現地に住み，骨を埋める覚悟で厳しい修行生活をするのだろうと思われるのも無理はない．学部時代にタイやミャンマーへの留学を経験した筆者にとっては，橙色，黄色，深い赤色の袈裟を着る僧侶たちは見慣れていた．とはいえ，僧侶に対してうっかり無礼な行為をしてしまうことを恐れ，無意識に距離をおいていたようで，彼らの生活や考え方についてはよく知らないままだった．しかし，仏教は，ラオスやその周辺地域での文化の基盤である．ラオスでは最短 1 日から出家が可能であるため，ラオス文化への理解，そして言語学習にうってつけだろうと考え，出家を決めた.

これから語る出家までの流れと，出家生活の中で体験した僧侶の世俗性は，ラオス人に語るといやな顔をされる内容だ．一般人の想像する「質素，倹約，禁欲」といった僧侶像，あるいは特に厳しい寺院の僧侶の生活とはかけ離れているからである．しかし私は僧侶たちと同じ生活を送ることで，ラオスの社会や文化を理解しようとしていたに過ぎない．もちろん，首都の一部の寺院での経験に過ぎず，ラオスの寺院や僧侶全体に当てはまるわけではないが，ここでは筆者の 3 週間の出家生活での実体験を記したい．そして，見慣れているが馴染みのない，僧侶たちに対して親しみを感じて頂ければ幸いである.

出家まで

ラオスへの渡航後，現地に知人のいなかった私は，出家に関する情報収集に勤しんでいた．ラオス人と知り合って二言目には，出家がしたい，と切り出すようにしていた．コミュニケーションが苦手な私にとっては，会話を広げるのにも役立った．そんな日々を

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

送っていると，

「托鉢をしたことがありますか？」

と声をかけてくる学生と出会った．彼は，幼い頃の虐待が原因で家族と縁を切り出家していたらしい．大学入学を機に還俗はしているものの，今でも頻繁に寺に遊びに行くそうだ．寺との関わりが深い彼に，出家希望の旨を伝えた．

「だったらまずは，今度僧侶たちと地方に遊びに行くけど来ないか？」

今まで距離をおいていた僧侶たちと遊ぶチャンスが巡ってきた．

当日，僧侶を 10 人ほど乗せたバンが出発した．最初に止まったのは，道端の食堂だった．昼ごはんらしい．ここで彼が，神妙そうにこう語った．

「僧侶と在家は，一緒に食事をとってはいけない．僧侶が食べ終わったら，私たちも食べていい．」

なるほど，僧侶との遊びには気をつけることが多そうだ．と思った矢先，

「でも，私たちは友達だから，一緒に食べても大丈夫だ．」

そこからしばらく車を走らせ，ついたところは川だった．袈裟を脱ぎだす僧侶たちは，沐浴するのかと思ったが，川に飛び込んで遊び始めた．一方で，袈裟をきれいに巻き直している僧侶たちは，自撮り棒につけたスマホをつかって自撮りを始めた．粗食なはずの彼らの筋肉質な身体，電子機器の所有率を目の当たりにした私は，出家する覚悟を決めることができたのだった．

出家当日

気を引き締めるつもりで，日本から持参した甚平を着て得度式に臨んだ．得度式とは，剃髪し俗世を捨て，出家する儀式だ．住職が読経しながら丁寧に剃髪してくれるのだろうと思っていたが，住職は昼寝中だった．出家を見に来てくれた友人たちが集まったところで，ひとりがおもむろにバリカンで私の髪を剃り始めた．聞けば，家で剃ってから寺に来ても良かったらしい．4 年程維持してきた長髪を剃り落とすのだ，という私の覚悟とは裏腹に，剃髪の儀礼的な重要性は薄いようだった．剃り落とした髪は，還俗まで寺の木の根本に置かれた．釈迦がその下で悟りを開いたとされる，インドボダイジュの木だった．

剃髪が終わると，次は授戒だ．僧侶になるにあたって守らなければならない戒律をパーリ語で復唱することで授かり，袈裟をまとう．授戒のために，再び住職の部屋を訪ねたが，返事がなかった．大学 4 年生の僧侶が住職の代わりに授戒を行なってくれたのは，

写真 1　剃髪は出家経験者のラオス人の友人が躊躇なく行なってくれた．
さながら写真撮影会といった，和気あいあいとした雰囲気であった．この後，眉も剃り落とした．

住職が外出をしていたことがわかった 2 時間後のことだった．

20 歳以下あるいは出家したばかりの，いわゆる見習い僧が授かるのは，十戒（殺生をしない・他人のものを盗まない・女性に触れない・嘘をつかない・お酒を飲まない・装飾品を身に着けない・音楽を聞かない・ベッドで寝ない・正午以降は食事をしない・お金に触れない）だ．

守られない戒律

僧侶としての生活で最初に実感した戒律は，不殺生だった．私が寝泊まりすることになった部屋は，トイレと水浴び場があり，水を貯めている桶から発生した蚊が部屋中を飛び回っていた．ラオスの蚊はデング熱やマラリアを媒介する恐れがあり，普段であれば，すべて退治して眠りにつくところであるが，僧侶としてはどうすべきだろうか．殺さないように蚊を防ぐ対策を考えていると，廊下からバチバチという音がした．電撃殺虫ラケットの音だった．托鉢で喜捨される食事の中にも肉や魚は含まれるが，これを食べることも許されている．つまり，不殺生戒は，自ら手を下すことが禁じられているが，やむをえない場合は仕方がない，という解釈のようだ．

数ある戒律の中で私が最も恐れていたのは，食事制限だ．戒律では正午以降の固形物の食事が禁じられている．午前中は，托鉢で得たもち米やおかずを食べることができるが，午後は同じように托鉢で得られる豆乳やインスタントコーヒーでしのぐのだ，と教わっていた．実は，午後の空腹に耐えられなければ，予定よりも早く還俗してしまおうか，と考えていた．空腹に慄きながら掃き掃除やほかの僧侶たちとおしゃべりをしていたら，夕方になった．すると，カットフルーツや，ロティというクレープのようなデザート，アイスクリーム等，さまざまな屋台が寺院の中まで入ってきて商売を始めるのだった．空腹の僧侶たちの寺でそんな商売を，と思いきや，小さな子どもの僧侶が，果物屋だ！お金はもってるか！と，連れて行ってくれた．僧侶のための学校でも，併設の食堂や周囲の商店では串焼きやお菓子など軽食が僧侶向けに売られており，午後の休み時間や放課後には，腹を空かせた僧侶たちが買い食いにやってくるのである．

写真 2　夜明けとともに始まる托鉢は裸足で行なう．ラオス人僧侶たちは慣れたものだが，私の足裏は毎朝悲鳴を上げていた．

特に都会の寺院は 10～25 歳くらいの僧侶が多く，修行のための施設というより学生寮的な性格をもっている．このような寺院では，厳しい修行を積み，悟りを開くことよりも，子どもたちの勉学や健康を重要視する方

写真 3　托鉢で得られた食事を 4 つのテーブルに分配し，10 人程度で囲んで食べる．
残ったものは，貧しい人々に分け与えるか，寺に住む犬や猫，地域の家畜の餌にする．

針を採っている場合が多い．また，夜中には住職が音楽を聞きながら散歩しているし，僧侶たちの通学にはスマートフォンとイヤホンが欠かせないし，日常的にお金を使って買い物をするのである．

守られる戒律

実質的に緩和されている戒律がある一方で，厳しく守られている戒律も存在する．僧侶としての生活で特に気を遣うのは，女性に触れない，という戒律だ．僧侶自身や，僧侶の着る袈裟であっても触れてはならず，触れてしまうと僧侶だけでなく女性の徳も下がるとされる．買い物などでの物のやり取りでは，相手が女性の場合，テーブルや周囲の男性の手を介さなければならない．バスやソンテオ（公共交通機関としての乗り合いトラック）の乗り降りでは，女性と十分な距離を取って座ったり，間に男性が座ったりと，それぞれが自発的に動くことで僧侶の席を確保するのだ．特に袈裟は大きな布でできているため，うっかり女性に触れてしまわないよう振る舞いに気をつける必要があった．

禁酒も厳しく守られている戒律である．若い僧侶はもちろんのこと，高齢者や住職もきちんと守っている．この戒律は本来，「人を惑わせる，陶酔させるものを禁ずる」という教えの解釈によるものである．その一方で，喫煙習慣のある僧侶は学生から高齢の僧侶まで，一定数存在する．明確に禁じられていないのだから大丈夫だという主張と，当時は煙草がなかっただけであり，飲酒と同様喫煙も慎むべきだとの主張が存在している．そのため，寺の方針や，僧侶の年齢によって扱いが変わるようで，特に学生に対しては生活指導的な意味も含めて禁煙とするところが一般的である．しかし，学生か高齢かにかかわらず，僧侶として人目に付くところでの喫煙は慎むべきという共通認識はあるため，彼らは寺院内の物陰で喫煙するのである．

時代とともに変わる僧侶の生活

僧侶による戒律の順守に影響する要因として，信仰以外にも，以下の 2 点が考えられる．ひとつは，世間体だ．僧侶は在家者の喜捨を受けることで生活を成り立たせている．厳しく戒律を守り生活する僧侶に対する尊敬の念が在家者に喜捨をさせているのであり，僧侶の世俗的な行動を在家者に見られては僧侶としての威厳が保てない．また，女性に触れると女性の徳も下がるとされるなど，在家者の不利益になるような行動もできないのだろう．

2 つ目は社会経済的事情である．ラオスでは経済的に困窮している家庭において，跡取りのための長子を除く，次男以降の男子が出家することが一般的であった．しかし実際の僧侶たちの話を聞くと，家計に負担をかけず首都の大学や僧侶向けの学校へ進学，そして就職することが出家の主な動機となっているようだった．私の出家中にも，多くの僧侶が大学卒業後，就職が決まったことで還俗していった．そして彼らは自分で生活していくのに十分な貯金が貯まるまでは，寺の手伝いなどをしながら寺に住み続けるのである．つまり彼らにとって出家は，生活手段のひとつという側面もある．そして，寺院は学生寮のような役割とともに，卒業後に自立した生活が送れるようになるまでの就職支援の役割を併せもつようになってきた．このような寺院の役割の変容を受け，学生の僧侶が健康的に成長し勉学に励むことができるよう，実質的に戒律が緩和されているということだ．住職が，僧侶たちの午後の食事や，寺院周辺での屋台の商売を黙認するのは，これに起因すると思われる．

最近，住職会議では日常的に喜捨を行なう在家者の減少が議題に挙がっているという．私が毎朝回っていた托鉢ルートでは 7〜8 組の一般世帯と，20 人弱の役所関係者が喜捨をしてくれていたが，これは全盛期の 1/10 に過ぎないらしい．またヴィエンチャン郊外にある，世間と離れて生活する林住部の寺院では，周辺に民家が多数存在するにもかかわらず，僧侶を満載したトラック 2 台で往復 1 時間かけて街に行き，喜捨を受けなければならなかった．いまのところ僧侶たちの食事は十分に賄うことができている．しかし余剰がなければ，寺院で働く貧しい人たちや，彼らの飼う家畜の餌となる分が確保できなくなってしまう．寺院は，僧侶になる以外にも，地域の社会経済的弱者のセーフティネットとしての役割も担ってきた．

写真 4　膨大な量の経を暗記し，寺のために真面目に働く彼らも，自由時間には無邪気に遊ぶ普通の子どもである．

ヴィエンチャンの僧侶たちは，在家者の信仰の希薄化や寄進の減少のもと，世俗的な生活の希求と，俗世を離れて修行に専念するための戒律の狭間で，時代の流れにどう対応していくかが問われているのである．